

大阪府の東部に位置する東大阪市は、人口約50万人を擁する中核都市で、ラグビーの聖地「花園ラグビー場」がある所として知られる。また、高い技術力を持つ製造業が集積する「ものづくりの街」としても知られ、人工衛星「まいど1号」の打ち上げ成功は大きな話題となった。

そんな東大阪市で長年地域医療に貢献し、親しまれているのが医療法人恵生会恵生会病院である。昭和58年に産科専門病院でスタートした恵生会病院は、その後小児科、内科、外科など診療科を増やし、現在では病床数184床を持つ中核病院として発展している。

近年特に力を入れて取り組むのが、生活習慣病の代表格といえる糖尿病の治療だ。人口50万人の大型都市にもかかわらず、東大阪市では糖尿病の専門医の数が少ない状況が続いていた。こうした脆弱な医療環境を改善するため、恵生会病院では平成28年4月に糖尿病専門医である宮川潤一郎医師を兵庫医科大学から病院長として迎え、糖尿病関連の診療体制の強化を図った。

宮川病院長は着任後、まずマンパワーの確保に着手した。「現在、糖尿病の専門医は4人、専門医を目指す研修医師を含めて5人体制で診療に当たっています。また、日本糖尿病学会認定の糖尿病療養指導士の資格を持つ看護師（CDEJ）が9名、大阪糖尿病療養指導士（LCDE）が8名在籍して、専門性の高い糖尿病治療が受けられるように環境を整えています」

さらに、東大阪市の民間病院で初めて「糖尿病学会認定教育施設Ⅰ」に認定されるなど、糖尿病専門医育成にも意欲的に取り組んでいる。

このように出産・子育て期の産婦人科・小児科診療から老年期の介護、そして生活習慣病である糖尿病治療など、あらゆる年代を対象にした質の高い医療が提供できる総合病院として、地域住民からの大きな期待と信頼を集めている。

一人ひとりの患者さんとしっかりと  
向きあい、温かみのある診療を心がけて  
いきたいと思っています

## 東大阪市の民間病院で初の「糖尿病学会認定教育施設Ⅰ」に認定 糖尿病治療を強化し、生活習慣病から地域住民の健康を守る

予防医学、出産・子育て期、生活習慣病、老年期の介護まで、幅広く高度な医療を提供する総合病院



医療法人恵生会 恵生会病院

病院長 宮川 潤一郎

## 未受診が大きな課題の糖尿病 合併症になれば命の危険も

年間20万人が受診する健診部の出張健診で早期発見・早期治療



幅広く高度な医療を提供する総合病院として、地域住民の信頼を集める恵生会病院

平成28年の「国民健康・栄養調査」によると、糖尿病有病者と糖尿病予備軍は合わせて約2000万人を数え、実に40才以上の国民の3人に1人の割合になるといふ。今や国民病ともいえる糖尿病だが、初期の段階ではほとんど自覚症状がないため、実際に受診している人の数は50%前後にとどまり、未受診が多いことが大きな問題となっている。

「糖尿病は適切な治療をせず、そのまま放置すると神経障害、網膜症、腎症といった様々な合併症を引き起こし、末期になると失明したり、透析治療などが必要となります。また、動脈硬化による心筋梗塞、脳卒中などの死亡リスクも高まるので早期発見・早期治療が非常に重要です」と宮川病院長は指摘する。軽い病と考えられがちな糖尿病だが、合併症を引きおこすまで重篤化すると日常生活も大きく制限され、命の危険性も高まることになる。

恵生会病院では疾病治療だけでなく、病気の予防

や健康の維持を促進する「予防医学」にも力を注いでいる。宮川病院長は「院内には健診部という病院併設の部署があり、企業や団体あるいは地域に検診車を派遣して、出張健康診断を実施しています。こちらでは年間約20万人にのぼる健康診断を行っており、糖尿病をはじめがんや骨粗鬆症など様々な疾病の早期発見に貢献しています」と語る。

また、医療法人恵生会グループの一つである大阪市内中心部にある恵生会アプローズタワーリニックスでも、人間ドックや健康診断を行っており、病気の予防、早期発見にグループの医療施設が連携して推進している。

「糖尿病は合併症が怖い病気ですが、早期の段階ではなかなかその怖さが実感できません。特に働き盛りの方は忙しくて、つい病院に行くことを後回しにする傾向があります。きちんと健康診断を受診し、異常や体調不良があれば、病状が進行する前に早目に対処することがとても大切です」

## 7つの職種で糖尿病患者を支援する「糖尿病療養サポートチーム・KDST17」

総合力を発揮して、一人ひとりに最適な医療を提供する

ひとくちに糖尿病患者といっても、その状態は千差万別だと宮川病院長は語る。「血糖値そのものに加えて表れる合併症状も様々ですし、患者さんの糖尿病に関する認識の違いや、治療に対する意識も異なります。このように一人ひとり異なる患者さんに最適な治療を提供するために、包括的な診療体制が欠かせません」

こうした見地から宮川病院長は、患者を支援する仕組みを強化するため、病院長着任早々に「糖



糖尿病は合併症になる前に、早期発見・早期治療することが重要だ  
(糖尿病患者さん用病棟展示物)

1人の患者さんをチーム医療で診ていくことがとても大切になってきます」と宮川病院長は強調する。

医者には容易に話せないことも、スタッフには気軽に話せる患者も多いという。「患者さんとのコミュニケーションが上手くいくことが、ひいては治療の成功にもつながります。そのためKDST-7の活動は、今後ますます必要不可欠なものとなっていくと思っています」

## 治療のモチベーションを上げ、治療中断を防ぐ「糖尿病教育入院」

糖尿病をよく知り、上手に付き合っていくことを学ぶ

糖尿病治療での課題は受診率が低いことに加えて、途中で治療を放置する治療中断の患者が多いことがあげられる。糖尿病はいったん発症すると、長期間にわたって治療を続ける必要があるからだ。

しかし、血糖値を下げるために行う食事や運動、生活習慣の改善を持続していく努力はつらく、負担に感じる人もいる。そこを乗り切るための秘訣は「糖尿病治療に対するモチベーションを上げることです」と宮川病院長は説く。

恵生会病院では糖尿病を正しく知り、食事や運動などの自己管理をしっかり行うことができると、3泊4日の「糖尿病教育を含めた短期入院」を実施している。「これは血糖コントロールを含めてKDST-7チームが多角的にサポートするもので、糖尿病について理解を深め、患者さん自身が自分の体の状態をよく知り、治療に対する動機付けを強化することによって、治療中断が起らないようにすることが目的です」

通院では難しい検査を入院中に集中的に行い、各専門スタッフが丁寧に患者の相談にのりながら、自宅に帰ってからでも糖尿病と上手に付き合っていくことができるように指導する。

例えば食事療法は、管理栄養士が実際の食事を通して、カロリーや食事バランスについて説明する。また運動療法では理学療法士や作業療法士が日常生活の中で気楽に楽しくできる運動を指導、また必要な物品・装具についての情報も提供する。

薬の服用については、薬剤師が症状に応じた正しい薬の服用の仕方や副作用について分かりや

すく服薬指導を行い、フットケア外来において看護師あるいはCDEJを中心とするスタッフが、足のケアや生活をするうえでの注意点についてサポートする。

「糖尿病治療は、医師が一人で頑張っても、患者さん自身が治療に積極的でないとうまくいきません。糖尿病に関する啓蒙をしながらモチベーションを高める『糖尿病教育入院』は、その意味ではとても大きな役割を果たしています」と宮川病院長は語る。

また、KDS7チームは、患者の家族や一般の人にも参加できる糖尿病教室を定期的に行い、糖尿病のより深い理解を促すための活動も担っている。

## 人としての絆が培われることが、医師の仕事の醍醐味

「血の通った温かみのある診療」を心がける

糖尿病専門医となつて長いキャリアを持つ宮川病院長だが、患者と向きあう際に常に心がけていることがある。それは「患者と医師」という狭い括りではなく、「人間対人間」のつきあいをベースに、診療に当たっても常に真摯に向き合っていくというスタンスだ。

「糖尿病というものは、一度診れば終わりではなく、長い時間つきあっていく病です。ですから、医師と患者は、良くも悪くも一生のつきあいになる場合が多いのです」

医師になりたての頃から診察している患者は、実に40年来のつきあいになるそうです。

「「「」まへへるや、もう家族のような存在になっていますね」と柔らかな笑顔を浮かべる。

宮川病院長は「患者さんに心を開いてもらい、信頼関係ができないと良い診療はできません」という。「長い時間を共に過ごすことで、医師と患者の立場を超えて一人の人間としての絆が培

われていく。私にとって医師の仕事の醍醐味は、まさにそういう部分にあります」

人間関係の希薄化が叫ばれて久しい昨今だが、医療の世界でも医師が患者に対して触診すらしない、患者と向き合わず薬だけ出すというような血の通わない診療風景が散見される。

しかし、宮川病院長は医師の仕事の基本は「人間らしい診療」であると話す。

「初期の頃から患者さんは私が診てきたというよりも、医師としての自分を育ててくれたという思いで感謝しています。これからも一人ひとりの患者さんとしっかりと向きあうことを忘れずに、温かみのある診療を心がけていきたいと思っています」

## 使命は「地域で安心して受けられる最高レベルの医療」を提供すること

最善の医療を届けるため、禅の精神でひたすらに邁進していく

糖尿病診療の様々な改革をスタートさせ、日々多忙を極める宮川病院長だが、今後の展望については次のように語る。

「糖尿病治療の強化を図る取り組みは、以前と比べ受診者が4倍近く増えるなど、目に見える結果として表れてきました。しかし、潜在的な糖尿病患者や予備軍はこの地域にまだまだ多くいることが予測されます。これからも引き続き、健診部や恵生会アローズクリニックと連携を取りながら、重篤化する前に治療が開始できる取り組みに力を入れていきたいと考えています」

また、糖尿病の合併症を防ぐには、循環器系内科や消化器内科など診療現場のさらなるレベルアップが必要となるため「これらの診療科の専門性を一層高めて、糖尿病治療の柱にもなるよう

PROFILE

宮川 潤一郎 (みやがわ・じゅんいちろう)

昭和 27 年生まれ。鳥取県出身。在学中に 1 年間の英国留学を経て、昭和 54 年広島大学医学部卒業。同年同大学医学部解剖学第二講座助手。昭和 55 年大阪大学医学部解剖学第三講座助手。平成 12 年同大学院医学系研究科 (分子制御内科学講座) 講師。内分泌代謝研究室チーフ、分子制御内科医局長、内分泌・代謝内科診療局長などを経て同 17 年 兵庫医科大学内科学糖尿病科助教授。同 25 年 兵庫医科大学内科学糖尿病・内分泌・代謝科教授。同 28 年 医療法人恵生会 恵生会病院 病院長。

医療法人恵生会 恵生会病院

<http://www.keiseikai.or.jp/>

INFORMATION

**所在地** 〒 579-8036 大阪府東大阪市鷹殿町 20-29  
TEL 072-982-5101 FAX 072-982-5503

**アクセス** 近鉄奈良線 瓢箪山駅から徒歩約 15 分  
近鉄けいはんな線 新石切駅から徒歩約 20 分

**設立** 昭和 58 年 8 月

**診療内容** 一般内科、糖尿病・内分泌・代謝内科、消化器内科、循環器内科、外科、産婦人科、小児科、眼科、整形外科、泌尿器科、リウマチ膠原病内科、神経内科外来、皮膚外来、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科

**外来診療受付** 月～金 8:00～11:00 13:30～16:00  
土 8:00～11:00  
休診日 日・祝日

**理念** ・安全で確かな医療で地域の皆さまに貢献します。  
・やさしさと、ぬくもりのある、質の高い医療を患者さんへ



チーム医療で糖尿病患者を総合的にサポートする KDST - 7

に育てていきたい」と意欲を語る。  
その他、地域で完結できる医療環境を整備することも、これからの大きな課題だと語る。現在国では住み慣れた地域で自分らしい暮らしができるよう「地域包括ケアシステム」を展開しているが、東大阪市では糖尿病をはじめ疾病の専門医の数が少なく、先進的医療を求めて大阪市や他市の病院に足を運ぶ患者も多い。  
しかし、宮川病院長はこのような現状に懸念を示す。「越境してわざわざ遠くの場合で診療を受けることは、本来の地域包括ケアシステムの概念から大きくはずれるだけではなく、患者さんにとっても負担を伴うことです。それが続くと未受診や治療中断のリスクも高まります。地域で安心して受けられる最高レベルの医療を提供することが、今後の我々の使命です」と力強く語る。  
座右の銘は禅の言葉である「精進」だという宮川病院長。その言葉の通り、地域住民の健康を守り支えるために、これからもひたすらに邁進していく。